



英語における<無生物主語>表現の存在理由について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藪井, 恵美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010164

英語における〈無生物主語〉表現の 存在理由について

藪井 恵美子

はじめに

次のような英語表現(1)~(3)は、それぞれ日本語に直訳すると、修辭的印象を強く与えることになる。

- (1) His pride didn't allow him to accept the reward.
(彼の自尊心が、その報酬を受け取することを許さなかった。)
- (2) Sickness deprived me of the pleasure of seeing you.
(病気が、あなたにお目にかかれる喜びを奪った。)
- (3) Business took him to Osaka.
(仕事が、彼を大阪に連れていった。)

が、英語においては、このような、まず概念や觀念などを示す抽象的な名詞を主語に、次に使役・授与・誘導を意味する他動詞を述語動詞に、そして人間を表す人称代名詞を目的語とする、いわゆる〈無生物主語〉表現が多用される傾向がある。なぜ、英語においては、人間以外のものを主語とする、擬人化性の高い〈無生物主語〉表現が好んで用いられるのであろうか。

そこで、本稿では、英語において〈無生物主語〉表現が多用される理由を、言語的観点と文化的観点に基づいて、随時、日本語と比較検討しながら、考えてみることにする。

1. 言語的な理由

1. 1. 名詞化の多用

まず、〈無生物主語〉表現と英語における〈名詞化〉(Nominalization)の多用との関係を考えてみる。毛利(1975)では、英語の名詞化という特徴が、〈無生物主語〉の表現に密接に関係していることを指摘する。「名詞的なもの」という主語の制約に従い、動詞的、形容詞的表現が名詞化し、抽象名詞として出現し、主語として組み込まれるのであると述べる。名詞化によって「何が何すること」、「何が何である」というような文が、「名詞的なもの」となる。

- (4) He died suddenly. → his sudden death
- (5) He loves nature deeply. → his deep love of nature
- (6) Jane was absent from the party. → Jane's absence from the party

たとえば、次例は、他動詞が名詞化された抽象名詞主語の例である。

- (7) Her knowledge of German gave her an advantage over the other girls.
 (彼女はドイツ語を知っていたので、他の女の子よりも有利だった。)
- (8) The employers' refusal to talk to the union precipitated the strike.
 (雇用者側が頑として労組との交渉に応じないので、ストは早まることになった。)

次に、自動詞が名詞化された抽象名詞主語の場合をみってみる。

- (9) Her separation from her family made her feel very lonely.
 (家族と離れているのが彼女にはとても心細かった。)
- (10) His admiration for her beauty blinded him to her faults.
 (彼は彼女の美しさに心を奪われて、彼女の欠点が目にはいらなかった。)

また、形容詞が名詞化された抽象名詞主語の場合は次のようになる。

- (11) His daughter's unhappiness made him long for his wife's wise counsel.
 (娘が不幸だったので、彼は妻の聡明な助言を思いこがれた。)
- (12) Ignorance of social usage can result in many blunders.
 (社会的な慣習を知らないと、大失敗を重ねることがある。)

このように名詞化された抽象名詞には、動詞や形容詞を含む文が関係していて、名詞化がいかに〈無生物主語〉表現に密接に関係しているかが分かる。

1. 2. 語順の固定化とその意味パターンの定着化

次に、〈無生物主語〉表現と英語の固定した語順及びその意味パターンとの関連性についてみていく。英語の主語の固定化をドイツ語と比較して、古川(1982)では、次のように述べる。「英語で格語尾消失によって主格の識別が不可能になったことは、英語の性格に重要な影響を及ぼしている。それは英語における主格位置の固定である。すなわち主語の先行である。主格が明瞭であれば、文中の如何なる場所にあっても、主格を見誤ることはなく、それが主部を形成する。英語では他の文成分と区別する手がかりがないので、主部の位置を固定するほかないのである。ドイツ語でも名詞の格変化はかなり崩れてしまい、かなり消失している。しかしドイツ語では冠詞、その他名詞の付加語の格語尾変化が明確で、主格たることの認識が困難でない。このためドイツ語では主部の位置は固定していない。」(p.298)英語において、主語が義務的であること、文頭に主語が固定化されていることが、語順決定の重要な条件となったのである。

また、安井(1989)では、英語の名詞的性格を論じるなかで、これが英語の固定した語順という一点に還元できるものではないかと考える。その一部として〈無生物主語〉表現を取り上げ、この構造が好まれることについて、直接的な形で答えるのは難しいが、究極的には、英語の固定した語順と結び付いている現象ではないかと示唆する。〈無生物主語〉表現は、叙述されるべき状況において、人間または、それに準ずる主語が適当ではない場合、主語として人間以外のものが選ばれ、その後、それに結び付くことのできる動詞が選択され、その結果生ずるに至ったものであるという。

一方、安藤(1986)では、「この表現の特徴は、無生物まで人間化して動作主性を与え、もって英語の愛用文型の一つである〈行為者－行為－目標〉(Actor-action-goal)のパターンを貫徹しているところにあると考えている。」(p.267)と〈無生物主語〉表現と意味パターンとの関連性を示唆する。

さらに、池上(1991)では、次のように述べている。「英語では、〈行為〉という出来事を〈主語＋動詞＋目的語〉という形式で表現することが強く定着しているために、本来厳密な意味では〈行為〉と言えないような出来事までも、この形式に当てはめて一見〈行為〉であるかのように表現するということが普通になっているように思える。これに対し、日本語ではそれに相等する表現形式は、なお本来の〈人間〉が〈行為の主体〉となっている場合にとどまっていた、それが一人立ちして他の場合も自らの形式に取り込むというところには至っていないという感じである。同じことが平行した形で表現されていても〈擬人化〉的な感じに差があるのは、日常の言語使用のレベルで〈行為の主体〉を〈主語〉に、〈行為の対象〉を〈目的語〉にして表現する形式がどれ位定着し、どれ位その本来の〈行為の主体〉＝〈人間〉という典型から離れて一人歩きを始めているかがそれぞれ言語で差があるからであると思われる。」(pp.120-2)ここでは、英語においては、〈行為の主体－行為－行為の対象〉の意味パターンが定着していて、それが擬人化の印象を強く与えると示唆している。

このように、英語において、〈無生物主語〉表現が多用されるのは、〈主語＋動詞(他動詞)＋目的語〉という英語の固定した語順とそれに対応する〈行為の主体－行為－行為の対象〉という意味パターンの定着化とが密接に関係しているものであると考えられる。

2. 文化的な理由

2. 1. 〈する〉と〈なる〉の発想

池上(1981)では、英語と日本語を比較した場合にみられるいくつかのかなり際立った対立的な特徴から、英語と日本語の相違を〈する〉と〈なる〉の発想の相違につながらと論じている。言語には、外界に対して、〈出来事全体〉を捉え、事の成り行きという観点から表現しようとする言わば〈なる〉的な言語と、出来事に関与する〈個体〉に注目し、それを際立たせるような形で表現しようとする言わば〈する〉的な言語という対立があり、英語は〈する〉的な傾向の強い言語、日本語は〈なる〉的な傾向の強い言語であるという。この発想の相違に関連する日英間の対立的な特徴として次の三つのものを挙げている。

まず、〈場所の変化〉と〈状態の変化〉に関するものである。英語では、go や come などの基本的な運動の動詞が、その本来の〈場所の変化〉を指す場合から 〈状態の変化〉を表すのによく転用されるが、日本語ではそうでない。逆に〈状態の変化〉を表す動詞が〈場所の変化〉を表すのに転用されるということがある。もし、〈場所の変化〉が個体への注目、〈状態の変化〉が全体的状況への注目ということによって特徴づけられるとすれば、英語は、個体中心の捉え方が本来そうでない分野にまで拡大されているわけである。逆に日本語は、出来事全体で捉えるという見方が、〈場所の変化〉にまで拡大されているといえる。

次に、〈もの〉と〈こと〉という発想に関するものである。〈個体への注目〉と〈全体的状況への注目〉という対立は、日本語における〈もの〉と〈こと〉の対立を想起させるものである。ある出来事が表現される場合、そこに何らかの個体を取り出し、それに焦点を当てて表現するのが〈もの〉指向的な捉え方であり、そのような個体を特に取り出すことなく、出来事全体として捉えて表現するのが〈こと〉指向的な捉え方である。相対的に、日本語が〈こと〉的思考、英語が〈もの〉的思考を好む

傾向にあることを示す。

さらに、〈行為の動詞〉の他動性に関して、日英語間の対立的な特徴を示している。ある意図的な行為を表現する〈行為の動詞〉には、その行為によってある結果を含意する動詞としない動詞とがある。このことに関して、日本語と英語で微妙ではあるがきわめて首尾一貫した差が認められるという。日本語と英語で互いにはほぼ対応すると思われる動詞について比較し、意味的な差が認められる場合には、日本語の動詞は〈行為〉の表示のみにとどまるのに対し、英語の動詞は、〈行為〉＋〈結果の達成〉を表示するということである（たとえば、「説得する」と persuade の間のずれなど）。これを抽象的なレベルで捉えると、日本語の動詞は〈他動性〉が弱く、英語の動詞は〈他動性〉が強いということになるという。日本語では、〈他動性〉の弱い〈行為〉そのものを表示する傾向にあり、また、他者へ向けられた行為を表す動詞までも、いわば「自動詞」化するような傾向があるという。このように「他動詞」が「自動詞」化する傾向にある日本語に対して、英語では、すでに十分な〈他動性〉を有する「他動詞」が、その他動性をさらに強めるという顕著な傾向が認められることを示す。また、〈他動性〉の程度が強くなっていく段階を、「自動詞」（行為が行為にとどまり、影響は他に及ばない場合、動詞は行為の対象となるものの表示を伴わない。）、次に、「自動詞＋前置詞句」（行為が他の対象に影響を及ぼすが、その影響が部分的にとどまる場合、行為の対象となるものは、前置詞句を介して動詞と関係する形で表示される。）、そして、「他動詞＋目的語」（行為が他の対象に影響を及ぼし、その影響が全体的である場合。行為の対象となるものは、動詞の直接目的語として表示される。）、「他動詞＋目的語＋前置詞句」（行為による全体的な影響として、対象がある状態にされる場合、行為の対象となるものは、動詞の直接目的語として、結果としての状態は前置詞として表示される。）というように規定している。英語では、〈他動性〉の低い段階から高い段階へ向かおうとする傾向がみられること、また、かなりの数の他動詞について使役化がみられ、〈行為動詞〉の〈使役動詞〉化が起こることなどから、英語は〈他動性〉の強化を指向する傾向が強いことが示される。

また、池上(1981)のこの論述に基づいて、安西(1983)は、英語の発想について次のように述べる。「英語はある状況ないし出来事を言語化しようとする時、まずこれを分析し、いわば分節化して、一個のアイデンティティーを持つと考えられる項を析出し、ある実体的な〈もの〉として名詞化する。さて、こうして名詞として定着された〈もの〉が、もう一つの、同じようにして抽出された〈もの〉に対してなんらかの動作を働きかけ、その結果として一つの状況なり、出来事なりが成立した——— 英語はこういう捉え方をする傾向が強いのである。これに対して日本語は、状況ないし出来事を、できるだけこれに密着して、丸ごとすくい取ろうとする。抽象的に分節化して、実体的な〈もの〉が、もう一つの〈もの〉に働きかける関係として捉えようとするよりは、あたかも状況が全体としておのずから成ったというように——— つまり、要するに〈こと〉として捉えようとする傾向が強い。」(pp.61-2)日本語は、状況や出来事を、人間を中心として見たまま、感じたまま表現するのに対して、英語は、〈もの〉から〈もの〉への働きかけといった「動作主性」の軸にそって概念化する傾向が強く、状況を因果律的に解析して捉え、表現するものであると説明する。英語では、人間以外のものに視点を置いて状況を捉えるということに抵抗が稀薄であることが示されている。

たとえば、次のような英語の〈無生物主語〉表現とその日本語訳では、日英語の〈する〉と〈なる〉という発想の相違が密接に関係していることがわかる。((13)~(20)の用例は、Lawrence, D.H. の *Women in Love* から。日本語は、小川 (1991) から。)

(13) And the knowledge made her almost sink to the ground in a faint, helpless, spent. (p.467)

(こう覚悟すると、心がぼうっとして、どうしようもなく、へたへたと床に崩れ落ちんばかりであった。) (p.1081)

「この覚悟が彼女を地面にほとんど倒れさせた」というような〈他動性〉の高い使役動詞による〈する〉的な英語の表現が、日本語では、人間の視点から感じたままを表現する〈なる〉的な文となる。英語の〈もの〉的に表現された主語 ‘the knowledge’ は、「こう覚悟すると」と、副詞節として〈こと〉的に表される。

(14) Her passion and her complete indecision almost made her ill. (p.314)

(熱情は激しく、決断はまるでつかぬ、いまにも病気になるような気持ちであった。) (p.1081)

日本語では、「病気になるような気持ちであった」というような〈なる〉的表現に変換されている。‘Her passion and her complete indecision’ は、形容詞と動詞を用いた文になる。それに対して、英語表現は、〈他動性〉の高い使役動詞からなる〈する〉的表現である。

(15) The pleasant sincerity of his voice made Ursula a pause to consider her own proposition. (p.142)

(彼の声の快い誠実さに、アーシュラは黙って自分の主張を考えなおしてみた。) (p.781)

日本語は、〈人間主語〉を動作主とした、思考に関する〈他動性〉の低い動詞からなる表現である。「彼の快い誠実さが、アーシュラに自分の主張を考える間をつくった。」という〈する〉的な英語表現は、日本語では、〈なる〉的表現と変換される。英語の動作主 ‘The pleasant sincerity of his voice’ は、理由を表す副詞句になる。

(16) Her contrariness prevents her taking it seriously. (p.105)

(根性曲がりのところがあって芸術なんぞに真剣になれないのさ。) (p.748)

日本語では、人間の視点から表現され、他動性の低い動詞による〈なる〉的な表現となっている。動作主 ‘Her contrariness’ は、「根性曲がりのところがあって」と文となり、理由を表す副詞的表現として〈こと〉として表される。「彼女の依怙地さが彼女がそれに真剣になるのを妨げる¹」というような英語表現は、〈他動性〉の高い動詞からなる〈する〉的表現である。

(17) Yet a certain perversity would not let her. (p.425)

(しかし、なにか天の邪鬼の気持ちがあって、すなおになれなかった。) (p.1043)

日本語では、英語の動作主 ‘a certain perversity’ は、「なにか天の邪鬼の気持ちがあって」と理由を表す副詞節として表現される。「しかし、天の邪鬼の気持ちが彼女をゆるさなかった。」という〈する〉的な英語表現は、〈なる〉的な表現に変換する。

(18) Her long silence gave consent at last.(p.364)

(彼女は長い沈黙によって、とうとう同意したかたちになった。)(p.986)

授与を意味する 'give' が用いられる。「彼女の長い沈黙が同意を与えた」という〈する〉的表現が、おのずとそうなったという〈なる〉的表現に変換されている。日本語では、英語の動作主、'Her long silence' は、「彼女は長い沈黙によって」という原因を表現する副詞になる。

(19) But the very thought of it sends me mad.(p.422)

(でも、それを考えただけで、あたし、頭がかっとしてくるの。)(p.1040)

日本語は、動作主は、「頭」に変換され、〈なる〉的表現である。'the very thought of it' という英語の主語は、「それを考えただけで」という条件を示す副詞節になる。「それに対するまさにその考えが私を狂気の状態に送る」というような英語表現は誘導を意味する〈他動性〉の高い動詞からなる〈する〉的表現である。

(20) She would have got up to look in the mirror, but the thought of the sight of her own face, that was like a twelve-hour clock dial, filled her with such deep terror, that she hastened to think of something else.(p.524)

(起き上がって鏡に映してみようかと思ったが、十二時間時計の文字盤に似て自分の顔が見えると思うと、恐ろしさにぞっとして、いそいで他のことに考えを移した。)(p.1138)

日本語は、「自分の顔が見えるという考えが、彼女をそのような激しい恐怖で満たした」というような英語の表現を、「恐ろしさにぞっとして」と〈なる〉的な表現に変換している。英語の、'the thought of the sight of her own face' という主語は、「自分の顔が見えると思うと」と文になり〈こと〉的表現になる。

英語の〈無生物主語〉表現には、〈もの〉的に概念化された〈無生物主語〉が他動詞と結合して、「動作主性」の軸にそって展開されるものが多い。特に、極めて〈他動性〉の強い使役的な動詞や誘導を意味する動詞による〈する〉的表現が好まれる。他方、日本語では、英語の〈無生物主語〉は文になり〈こと〉的に捉えられる。〈人間主語〉を動作主とするか、または、〈無生物主語〉が動作主であるときは、英語より〈他動性〉の低い動詞と連鎖する表現に変換される傾向にある。見たまま、感じたままを表現するという、人間の視野を中心に置いた発想、〈なる〉的発想が関係しているといっ
てよい。一方、英語にみられる〈無生物主語〉表現には、〈する〉的発想(〈もの〉指向性、〈他動性〉強化の指向性など)が密接に関連しているものであるといえるだろう。

2. 2. 擬人化と〈共感〉

牧野(1996)では、日本における「ウチ〈かかわりの空間〉とソト〈かかわりのない空間〉」という文化的な概念と言語現象との関連性について論じている。その中で、ウチとソトとをつなぐものとして、アニミズム(魂のないものに魂を入れ込もうとすること)にみられる〈共感〉(empathy)(観察者と

対象との心理的な距離) という心理を挙げ、〈共感〉と言語との相関性について述べる。アニミズムの根底にある〈共感〉と擬人化という言語現象について次のようにいう。「アニミズムは魂のウチ化という共感のプロセスで成就するのですが、これは、擬人化というメタファーの原点でもあります。」(p.159) つまり、擬人化が、人間のソトにある生命や精神を感知し、〈共感〉するという視点と密接に関係する言語現象であると解釈されている。たとえば、本来は人間を主語に取る動詞が、人間以外に使われる次のような表現の背後には、このようなアニミスティックな〈共感〉が認められると述べる。〈共感〉が存在し、その結果生じたのが擬人化であるという視点を示すものであるとも考えられる。

- (21) 森が語りかけてくる。
- (22) 雷が来た。
- (23) 花が笑っている。
- (24) 砂浜を歩きながらの口づけを午後五時半の富士が見ている。

このような、擬人化が、アニミスティックな〈共感〉を要とする表現であるという視点は、英語における次のような概念や観念などを表す抽象的な主語による擬人化にも適応できるだろう。

- (25) His damned honor will make him ask me if I want to divorce Rhett and marry him.
(Mitchell, Margaret. *Gone with the Wind*. p.992)
(彼の体面が、彼に、私がレットと離婚し彼と結婚することを望んでいるかどうかということを探ねさせるだろう。)
- (26) My observation on human nature have induced me to think otherwise.
(Irving, Washington. *The Sketch Book*. p.72)
(私の人間性の観察が、私を違うふうに変えさせた。)
- (27) The intense horror of nightmare came over me. (Bronte, Emily. *Wuthering Heights*. p.67)
(恐ろしい悪夢の恐怖が私を襲った。)
- (28) But my ill fate pushed me on now with an obstinancy that nothing could resist.
(Defoe, David. *Robinson Crusoe*. p.18)
(しかし、悪運が何もかも逆らえない頑固さで私を押し進めた。)
- (29) No doubts assailed him. (Maugham, W.S. *Of Human Bondage*. p.54)
(疑惑が彼を襲いはしなかった。)
- (30) A spasm of pity squeezed her heart.
(Mansfield, Katherine. *The Garden Party and Other Stories*. p.90)
(悲しい発作が彼女の心を握りしめた。)
- (31) Monday morning found Tom Sawyer miserable.
(Twain, Mark. *The Adventures of Tom Sawyer*. p.40)
(月曜の朝がトム・ソーヤがみじめな状態であるのを見つけた。)
- (32) Oh, and the beauty of the subjection of his loins, white and dimly luminous as he climbed over the side of the boat, made her want to die, to die.
(Lawrence, D.H. *Women in Love*. p.203)

(ああ、よじのぼって舟べりを越すときの、白くほのかに光る腰、その腰の曲げ方の美しさが、彼女を死にたくさせた。)

これらの英語表現にみられる、抽象的な主語による表現の背景にも、〈共感〉が存在するものであると解釈できる。抽象的な主語を動作主とする表現には、不可視的な概念や観念を、生命や精神性を有するものと直観し、〈共感〉するというような、日常とは多少切断された感性が密接に関係しているのだと考えられる。特に、英語において、次の例文のような、具体的な概念や観念を指示せず、漠然とその場の状況を表すといわれる非人称の‘it’が動作主となる表現の場合には、概念や観念などのように具体的に言語化されえない、漠然とした何か超越的な存在に、生命を感知するというような〈共感〉が関与しているとも考えられる。

(33) It made me sorry for him when Tom had failed in his attempt.

(トムの計画が失敗したとき、それが私に彼のことを気の毒に思わせた。)

(34) It put him out desperately if he saw the new moon through glass.

(ガラス越しに新月を見たりすると、それが彼をひどく悩ませた。)

英語では、〈無生物主語〉が動作主となる表現が多用されている。特に、抽象的な主語が他動詞と連鎖する表現の使用が日本語に比べると顕著である。このことは、英語の話者は、可視的な事物や自然だけでなく、不可視的な概念や観念などに対しても、生命や精神性を感じ、〈共感〉の心理を出現させることに抵抗が稀薄であるからだと考えられる。〈共感〉の視点を入れ込む対象が広いのだともいえるだろう。英語にみられる〈無生物主語〉表現には、話者の〈共感〉が密接に関係しているものだと考えられる。

まとめ

〈無生物主語〉が動作主となる表現が、英語において多用されている理由について、言語的観点と文化的観点に基づいて述べた。言語的な理由としては、英語では名詞化による抽象名詞が〈無生物主語〉として多く用いられること、また、〈主語＋動詞(他動詞)＋目的語〉という固定した語順とそれに対応する〈行為の主体－行為－行為の対象〉という意味パターンの定着化などが密接に関係するものだと考えられる。文化的な理由を、日本語との比較から考察すると、〈する〉と〈なる〉という日英語の発想の相違がこの表現と密接に関係するものだと考えられる。また、擬人化は、話者の〈共感〉が要となる言語現象であるという視点から、〈無生物主語〉表現と〈共感〉とを関連づけて考えてみた。英語では、具象的な主語だけではなく、抽象的な主語に対してもこの〈共感〉が出現しやすいと考えられる。英語の話者は、なんらかの感情や行動の生起や状況の変化に際し、その刹那、概念や観念などに生命、精神性を感知し、〈共感〉する傾向が強いのだとすることができる。以上のように、英語にみられる〈無生物主語〉が動作主として用いられる表現には、言語的、文化的な両方の要因が密接に関係しているものと考えられる。尚、本稿では、文という単位における〈無生物主語〉表現に焦点を当て、その存在理由について考察を行なったが、コンテキストにおける〈無生物主語〉表現についても、今後考慮すべき重要な点であると思われる。

参考文献

- 安西徹雄, 1983, 『英語の発想』, 講談社.
安藤貞夫, 1986, 『英語の論理・日本語の論理』, 大修館書店.
池上喜彦, 1981, 『「する」と「なる」の言語学』, 大修館書店.
———, 1991, 『<英文法>を考える』, 筑摩書房.
江川泰一郎, 1968, 『文の転換』, 研究社.
———, 1991, 『英文法解説』, 金子書房.
小川和夫, 1991, 『恋する女たち』『集英社ギャラリー「世界の文学」4』, 集英社.
影山太郎, 1996, 『動詞意味論』, くろしお出版.
金口儀明, 1968, 『主題と陳情(上)』, 研究社.
金子尚一, 1990, 「非情物主語の問題から」『解釈と鑑賞』55巻7号, 至文堂.
斎藤武生・原口庄輔・鈴木栄一, 1995, 『英文法への誘い』, 開拓社.
澤崎九二三, 1954, 『文(上)』, 研究社.
角田太作, 1992, 『世界の言語と日本語』, くろしお出版.
藤原 博, 1984, 『英語の構造』, 大修館書店.
古川尚雄, 1982, 『英独比較語学』, 溪水社.
牧野成一, 1996, 『ウチとソトの言語文化学』, アルク.
毛利可信, 1975, 「英語の主語と日本語の主語」『言語』4巻3号, 大修館書店.
森田良行, 1995, 『日本語の視点』, 創拓社.
安井 稔, 1989, 『英語学と英語教育』, 開拓社.
山川喜久男, 1968, 『主題と陳情(下)』, 研究社.
山梨正明, 1995, 『認知文法論』, ひつじ書房.
渡辺 茂, 1957, 『文とその要素』, 研究社出版.
Leech, Geoffrey and Jan Svartvik. 1975, *A Communicative Grammar of English*. Longman.
Quirk, Randolph · Sidney Greenbaum · Geoffrey Leech · Jan Svartvik. 1985, *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
Simpson, J.A. and E.S.C. Weiner. 1989, *The Oxford English Dictionary*. Oxford.

例文の出典

- Bronte, Emily. 1847, *Wuthering Heights*. Penguin Books.
Defoe, David. 1719, *Robinson Crusoe*. Penguin Books.
Irving, Washington. 1819, *The Sketch Books*. Signet Classic.
Lawrence, D.H. 1921, *Women in Love*, Penguin Books.
Mansfield, Katherine. 1922, *The Garden Party and Other Stories*. Penguin Books.
Maugham, W.S. 1915, *Of Human Bondage*. Penguin Books.
Mitchell, Margaret. 1936, *Gone with the Wind*. Pan Books.
Twain, Mark. 1876, *The Adventures of Tom Sawyer*. Penguin Books.